

## 研究所だより

サリドマイドやスモンをはじめとする薬害訴訟が多くの患者の「死以上の病苦」の中でどれだけ長い年月をかけていたのかを思うと、「薬害エイズ」の問題で日々新たな事実が暴露されてゆく過程はまるで劇画でも見ているかのようでした。菅直人厚生大臣が果たした役割も大きかったが、何といても氏名を公表された勇氣ある方々と支援した人々、若者たちの存在が大きかったように思います。組織されることのなかった人々の勝利とっていいのではないのでしょうか。昨年の沖縄の集会でも中心的役割を果たしたのはやはり従来型の組織ではなく、「組織されたことのない」人々でした。協同組合運動に関するものの一人として、人々のこの変化と協同運動は共に歩むべきではないのかと思うのですが。少なくとも経済行為だけに目を奪われている協同組合は、急激に色あせた存在となってゆくのではないのでしょうか。

「医療システム研究会」が活動をはじめます。第2回研究会（3/16）で「農民とともに」をいう佐久病院を舞台にした映画を拝見。昭和20年の農村に赴任した若月先生が農村の実態を前に怯むことなく、あきらめることなく取組んでこられた偉大な足跡に驚きと感動を新たにしました。若槻先生は「医療は地域に根ざしたものだ」と言われる。時代がどんなに変化しても結局は地域、コミュニティということが問われ続けていたのではないかという気がした。その若槻先生は長野県高齢者協同組合の理事長に就任された（3/24）。

センター事業団の若手研修会（3/27・28）で、参加者が互いにインタビューをしてこの1年を振り返るといふ企画を組んだ。インタビューの視点が様々でおもしろい。インタビューの課題は「労働者協同組合の1年、特に協同ということに関して」。やや抽象的すぎたかもしれないが、それぞれが体験した労働者協同組合の裏返しを相手に質問

をしている。参加者がどういう労働者協同組合観をもっているかが良くわかるのである。「何故自分の質問は他の人と違うのか。そういう質問は自分にはなかった視点なのか。何故そういう問題に気付かなかったのか。」違いに気付き、そこから自分のこの1年を深く考えるきっかけにできれば成功だったのだが。

同じ研修会で「さよなら日本株式会社」というNHK衛星第2で放送されたビデオを見た。昨年暮れ、制作スタッフの一人に労働者協同組合に關してお伝えしていたので興味もあった。タイトルに比べてやや迫力不足という印象である。これは番組が対象としている「日本株式会社」を越える存在としての非営利協同の様々な運動を研究者が充分消化し理論化していないところに原因があるようだ。勿論その責任のいったんは我が研究所にもある。事実、協同総合研究所には時々、資料を求めて研究者やマスコミ関係の方々から連絡がある。労働者協同組合・高齢者協同組合を伝えるのであるが、理念や理想に関する以上に求められているのが実際の非営利協同の活動である。それらのトータルな把握と理論化が急がれている。また、協同総合研究所に労働者協同組合の資料が体系的に保管されていないことも問題で、反省点としている。実は今年12月に新しい事務所に移転する予定で、若干資料スペースも確保される。いいきっかけなのでしっかり資料整理をしておきたい。

昨年9月から研究会を重ねた「労働者協同組合の第1次要綱」がまとまった。4月20日の第6回基本研究会で発表される。完成した法案ではなく、これから協同組合関係者の方々には勿論、労働者自主生産企業の方や労働組合運動、市民運動に携っていらっしゃる方々に様々に議論して頂きたいと願っている。

（坂林 哲雄）